



発行所 / 学校法人 聖隷学園
 浜松市三方原町3453
 電話 / 053 436 5311
 〒433-8558
 発行責任者 / 長谷川 了

聖句

「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」
 (レビ記一九・一八)

聖隷学園六カ月を経て思うこと

聖隷クリストファー看護大学 学長 深瀬 須加子



聖隷学園の一員となって早や六ヶ月、まだまだ分からぬことが多いのですが、その中で学園の精神と、学園運営の方向について未熟ながら私なりの理解はして参りました。

現代は、いずれも特に私学では経営の難しい時代に向っており、本学園も積極的にこの難しい課題を荷っており、これを克服するため、私共学園の各校がそれぞれに内容の充実を図り、連携の絆を太く、強くしてゆく必要があります。

一九九七年に立てられている学園十周年中期計画の一つ一つは、この課題に向っての大きな事業であると想われます。その第一が、福祉医療ヘルパー学園時代も含めて既に創立二十周年をむかえている介護福祉専門学校の発展的解消による社会福祉学部増設であることは周知のとおりです。これは、社会ニーズや聖隷の本来の活動事業に則るものとはいえ、学園にとっては大事業といえます。この事業に付随して起こる数々の業務を前にして、改めてその業務の重さをひしひしと実感としてきた次第です。教職員一人一人がこの

重要性を理解し協力してゆくことが鍵ではないかと思われまふ。

学園報二一号によると、昨年(一九九八年)は聖隷学園浜松衛生短期大学の創立三十年を迎えたこと、聖隷クリストファー看護大学が大学院を設置できたことの喜びが両学長から紹介されております。十八歳人口の減少や教育に関する社会情勢の変化を踏まえ、大学等の設置には現在抑制がかかっていますが、看護系、福祉系大学の新設あるいは増設については時代の要請により例外として認可されており、今後も各地に設置されていくことは必定であります。そのような状況の中で、大学院の設置を準備し認可を得るためには、特に教員の充実を図ることに大変なエネルギーが使われたことと推測されます。それ故に、大学としての喜びは、一際大きいものだったと思われまふ。聖隷学園にとってもまた、現在の高校の前身である看護婦養成校時代から今日までの長い道のりの中で、昨年は大きな発展をなし得た喜びの年であったと思われまふ。「聖隷学園二十年の歩みと展望」を拝見すると、今日まで

の間、時代の余波により受けた数次に亘る波瀾と危機を、その都度乗り越えてきた労苦を教えられれるとともに、聖隷の底力を感じさせられた次第です。当時の教職員の方々の祈りと並々ならぬ働きに対し、心からの敬意の念を抱かずにはいられませぬ。このような経緯があつて私共が今日を迎えられていることに、神の深いお恵みとお導きに感謝しなければならぬと思ひます。

本年、一九九九年からは、二二世紀に向けてのいわば第二のステップを登る年に当たっていたと言えるでしょう。冒頭にも記したように、二〇〇二年四月に向つての社会福祉学部増設については、着実にその準備は進んでおります。社会福祉学部が開設されると、短期大学部、看護学部を含め現在の看護単科大学から三学部を持つ大学に拡張されることとなります。そのことに合わせて組織の改革を行わねばならぬ必要がありまふ。また、教育者にとつて常に教育内容、教育方法についての向上を考えることはいつまでもなく、学生達の育成についても教員にとつては重

要な課題であります。學術知識、技術を伝授する従来からの教育方法から、情報のあり余る現代は教育方法についても考え直さねばならない時代に入つていいると思ひます。聖隷の創設期の時代に感じとられた前掲「聖隷学園二十年の歩みと展望」から聖隷の伝統であると思われる、学生と教職員との交わりの中の自然な温もりが受け止められまふが、方法は違つていても現代の教育にどのように生かすかが求められているように思われまふ。

大学においては昨年末までは、八年前の大学開設から大学院の設置までの、いわば創設期、第一ステップであり、吉田前学長を中心に各教職員の方々の総力による大学の基盤作りの時期であつたと思ひます。この間、またこれからも教員の異動がありながらも、しっかりと作られたこの基盤の上に、時代の変化を見しつづつ、必要とする大学の改革を行つていかなければなりません。このようにして大学は一層その根を大地に深く張り、幹を空に大きく伸ばし葉を豊かに繁らせ、ゆるぎない大樹に成長するのでありまふ。このことは同時に、当学園の先人の労苦と貢献に報いる所以でもあると考えまふ。皆様と共に神の一層豊かな恩寵をお祈り申し上げます。

聖書のことはば

聖隷学園 宗教主任 聖隷学園 浜松衛生短期大学 教授 佐柳 文男



右上の聖句はイエスが多くの律法の中で最も重要なのは何かとの問いに答えて選んだ二つの掟のうちの一つである。でもなぜ「自分よりも隣人を愛しなさい」となつていないのだろうか。その方がもっと尊い掟のような気がする。

たしかに私達は誰でも自分を愛する。それが問題なのではないだろうか。誰もが自分よりも隣人を愛することができれば、この世の問題はほとんど解決されるのではないだろうか。先ず自己愛を何とかしなければいけないのではないだろうか。

聖書はそう考えない。そもそも私たちが自分を愛するのは、自分が世界一美しいからだろうか。自分が世界一の金持ちだからだろうか。自分には罪も欠点もなく、理想的な人間だからだろうか。聖書は私たちが自分を「罪人の中で最たる者」(テモテ一・一五)であると知りながらも愛することを知っている。自己を嫌悪しながらも自分を愛することを知っているのである。

私たちは自分が美しいことを知りながら自分を愛するのに、美しくない隣人を愛することができない。罪や欠点のある隣人を愛せない。それが人間の根本問題ではないだろうか。



社会福祉学部設置の理由と趣旨

法人事務局長 堀口 路加

二〇〇二年四月社会福祉学部開設を目指し、本年六月文部省への事前相談を開始しました。今回計画の社会福祉学部には介護福祉コース(入学定員四〇名)と社会福祉コース(入学定員五五名)の二コースを置きます。社会福祉コースには他に三年次編入学定員一〇名を設ける計画で総定員は四〇〇名です。介護福祉コースでは所定の単位を取得することで介護福祉士の資格及び社会福祉士国家試験受験資格、精神保健福祉士国家試験受験資格が得られます。社会福祉コースでは所定の単位を取得することで社会福祉士国家試験受験資格及び精神保健福祉士国家試験受験資格が得られます。その他、両コースとも社会福祉主事、知的障害者福祉司、身体障害者福祉司、福祉レクリエーションワーカーなどの資格の取得も可能となるよう計画しています。又、生涯学習ニーズへの対応として科目等履修生制度、編入学制度はもちろんだ、夕方以降まで授業時間帯を拡張し、働きながら大学で学べる環境の提供が計画されています。さらに聖隷研究所(仮称)と聖隷歴史資料館を大学に附属し、聖隷に働く人々をはじめ地域に開放し、地域と大学との交流の場としていきます。社会福祉学部の開設にあわせ二〇〇二年四月には、大学及び短期大学の名称変更も予定されています。

単に名称変更にとどまらず、社会福祉学部と看護学部、短期大学看護学部の合同授業や単位互換も行われるよう、三学部教育課程委員会にて検討が始まっています。これまでに約二年間にわたり、聖隷集団各法人の理事長、外部の識者の方々から社会福祉学部増設についてご意見をいただきました。特に「なげ聖隷学園が大学に社会福祉学部を設置しようとするのか。このことをはっきりとすることが大切」というご意見は、学園の目的、使命を再確認することに繋がる貴重なご意見でした。

社会福祉学部を設置することで聖隷学園の目指すものに大きく一歩前進できるものと信じています。

以下、「社会福祉学部増設の理由と趣旨」から、中心部分を抜粋して掲載します。

「隣人を自分のように愛しなさい。」これが聖隷学園の基本精神です。自分を愛するように隣人を愛する、すなわち、人と共にあれ、人と共に生きよということが示されています。共に生きよとする自分自身と目の前の一人の人間に関わる姿勢を示す聖書の言葉として、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」があります。この最も小さい者の一人は、神の像(かたち)を宿して創造された存在であり、地位、財産、性別、人種、国籍に関わりなく神の前に「ひとり」として認められ、何者にも侵されぬ「尊厳」を持つています。神の像を宿し創造された故、一人一人の存在が尊い。これが聖書の示す人間観です。ライン川周辺に今なお残るクリストファー伝説は「クリストの弟子になることを望み、川の渡し守をしていたクリストファーが、ある嵐の夜、少年の姿に身を変えたイエス・クリスト、世界の全ての罪と苦しみを背負って十字架にかかったイエス・クリストを大切に、必死に背負い、河を渡りきった」と伝えてあります。大学名の「クリストファー」には病人や障害をもつ人、お年寄りの不安や苦痛、悲しみを理解し、クリストファーがクリストを大切に背負ったように、これらの人々を大事にケアする人材がこの大学から育ててほしいとの願いが込められています。聖隷学園の人材養成の基本は、イエス・クリストが自ら弟子の足を洗い手本を示されたように、行って同じようにすること、またクリストファーがイエス・クリストを背負ったように、神に仕え、人に仕

<将来構想図>



えて生きよとする心を持った人材を育てることにあります。聖隷の歴史の源流には、世の中から見捨てられ、孤独の中にいた結核患者と共に生きた愛の実践がありました。聖隷集団には、その生成の歴史の根幹から同じ理念を受け継ぐ、社会福祉機関、医療機関があり、教育研究機関である聖隷学園は隣人愛を基本精神に据え、もっとも小さい者の一人と共に生き、そのニーズに応えるための進取の精神を受け継いできました。社会福祉、介護、看護は人に対して何かをすることですが、ひとりひとりの人の前に立つたとき、その人のニーズは沈黙し、潜在し

ていることが多くあります。自分の苦しみ、悩みさえも自ら訴える力を持たない人がいることを理解しつつ、言葉にならないその人の心の内に隠されている深い思いに傾聴し、意志と願いを汲み取らなければなりません。こうした感性と心を土台に、冷静な態度、深い洞察力、豊富な知識と技術を身につけた人材の養成がこれからの時代には必要です。

現代社会は「合理」「効率」という尺度と「カネ」「モノ」という成果が、社会全体の価値観にまでなっています。経済発展によりもたらされた豊かさの裏側で、私たちが「ゆとりある時間」を失い、「のびのびした空間」を犠牲にし、「うるおいのある人間関係」を喪失しました。さらにハイテク化の進展により、今の時代は手間をかけることを省き、短時間に、安くすませることに意識は集まり、コンピュータネットワークの普及により顔を合わせることをさえ省かれることになってきています。人のつながりがますます希薄になっていく時代だからこそ、人と共にあり、共に生きる、そして手間をかけることを惜しまない社会福祉の視点が大切なのです。時代は科学の急速な進歩により、かつて予想もできなかった深刻

な課題、たとえば体外受精、代理出産、遺伝子組み換え、クローン、脳死、臓器移植、ホスピス等々に直面しています。すべて人間の生存の根幹に関わり、いかに生まれ、いかに生き、いかに死ぬかが問われています。社会福祉の価値観が、健康で文化的な最低限度の生活を保障していくこと、から、いかにより良く生きるかに転換していくことを迫られているのです。

日本は経済援助では世界一になりましたが国際社会、特にアジア諸国では、必ずしも経済に重きを置かない文化が存在します。経済成長、効率、生産性という尺度では測ることのできない価値、経済的には貧しくても、心豊かに暮らしていく人々の生活があります。物の豊かさゆえに心が貧しくなった私たちにとって、これらの国々は援助対象であるばかりか、「人間の生き方」を学ぶべき対象として、さらには共に生きる地球人として認めねばなりません。しかし現実には、地球人であることとを共通の土台にして交流することは決して容易ではありません。それゆえ、普通的人間観を根底に据え、人間的連帯を深め、地球規模で共通する課題に責任を負うNPOの視点が本学社会福祉学部における一つのテーマとなります。このNPOの視点が私たちに与えるのは、地域の実践であり、それは国際社会での実践へと広がりをみせ、それを担う人々が21世紀の多文化、多民族の共生の時代に異文化、異民族と共に生きる価値観、人間としての思いやり、違いを認め尊敬し合う、社会福祉の心に基づく生き方につながることを確信するのです。

医療、福祉、教育研究機関が連携、統合し事業運営が展開されている聖隷集団だからこそ、その使命を自覚し、地域に根ざした実践、さらにはアジア諸国をはじめとした国際社会に人材を送り出していくことにつながるような社会福祉学部の増設が必要だと考えます。

SEIREI CAMPUS

聖隷学園情報ネットワーク近況

法人事務局電算室長

長谷川 良行

「大学は科学的方法でサイエンスを探究する場であるが、看護学はサイエンスだけでは全うされない、鋭い感性とともに、いとわしい心、愛の心があつて取りが完成する。これは、一九九二年五月、聖隷クリストファー看護大学開学式での記念講演で聖路加看護大学学長当時の日野原重明先生が言われたことです。サイエンスを探究する上で、これからの時代、情報化は必須の課題と言えるでしょう。看護とは人間の生命に関わる仕事であるだけに、世の中の合理的、効率的な価値観とは本質的には一線を画すものだと思います。とはいえ、医療の現場は最先端の医療機器に埋まり、医療情報はデータベース化され、ある面では合理的効率的価値観で情報化されねばならぬ側面もあり、コンピュータなしには考えられない状況です。時代は後戻りしないでしょう。情報化はますます進展していきます。それだけに看護職に必要な「いとわしい心、愛の心」を育むことは今まで以上に大切にしつつ、情報化された現場に尻込みせず、高度に情報化された臨床の現場での確に情報を活用し、判断できる力を育てる必要性はより高まっていくものと考えます。

聖隷学園情報ネットワークを敷設して一年が経過します。在学生の中にもまた四月に入學してきた学生の中にもすでにインターネットを利用し、ホームページから情報を収集し、電子メールで遠く離れた友人とコミュニケーションをとることが日常生活の一部になっている学生がかなりの人数います。電子メールを日常的に使って、インターネットを利用して情報を収集することは特別なことではなく当たり前のことになってきているのです。自宅にコンピュータを持っているだけでなく、携帯電話やPHSを八割、九割の学生が持っている時代です。それらがあれば

メールが送れ、インターネットを利用できる時代です。情報化の波は驚くべき速さで、予想以上に広く、世代を超えて広がっています。五年後はあるかのを考えるのがとこまで進んでいるのかを考えると怖いし不安を感じます。一九九八年度は、学内LAN装置整備、教育学習方法高度情報化推進等のために総額一五五、七五〇千円の事業費をかけ一気に整備をしたわけです。別表参照)その整備状況と今後に向けての課題を以下にレポートします。

大学、短期大学では、大学校舎内のコンピュータ教室のコンピュータ及びネットワーク設備を共同で更新し六一台のコンピュータとネットワークサーバーを整備した他、すべての講義室研究室、図書館をネットワークで接続しました。このネットワークは急速に進むマルチメディア教育に対応するための幹線は一ギガbps、支線は一〇〇メガbpsとし専用線で岡崎国立共同研究機構につなぎ、ネットワークに接続しているコンピュータはすべてインターネットが利用できるような環境になりました。介護福祉専門学校では学生用のコンピュータを一〇台、高等学校においてもコンピュータ教室を新規に整備し四一台のコンピュータを設置しました。介護福祉専門学校と高等学校においても大学・短期大学とは別の専用線を利用して常時インターネットに接続できる環境が整いました。利用者別にみると、教員はほぼ一人一台のコンピュータをもつようになりまし

た。学生は情報倫理講習の受講を前提に原則として全学生に学内LAN利用アカウントとメールアドレスを配付し、大学・短期大学コンピュータ教室、短期大学コンピュータ演習室、図書館に設置されているすべてのコンピュータを利用できます。さらに大学ではマルチメディア教育装置として、ノンリア編集機とエンコーダーを購入し

ビデオ教材をはじめとする教材をコンピュータで編集し授業で利用したり、学内LANを介してデジタル化したビデオ教材を利用できるような装置を購入した他、これらマルチメディア教材を教室で有効に利用できるよう電動スクリーンやプロジェクターも整備しました。実際の利用状況をみてみると、この一年間、さまざまな変化が起きたことに気がつきます。第一に挙げられるのは、学生のコンピュータに対する意識の変化です。コンピュータに対して特別な意識を持つことなく、身近な道具という感覚になっていきます。第二に、いくつかの授業において授業教材の一つとしてインターネットで得た情報を取り入れるようになったことです。世界中の有効な最新情報をインターネットを介して即座に授業に取りこみ利用する機会は今後ますます増えていくものと考えられます。第三に、教員がホームページを作成し授業の内容を掲載して学生に事前事後学習ができる環境を整えているものや授業での理解度を確認するためのテストをホームページ上で行うケースも出てきました。さらに、教員が日頃考えたり感じていることをエッセイ風に掲載したりして、学生との親密感を深める努力が重ねられています。また、試行錯誤の段階ではありますが、確実に前進しているといえます。

一方では若干の懸念材料も見受けられます。一つは、非常によくコンピュータを利用する学生がいる反面、そうでない学生も存在することです。学生が利用できるコンピュータの台数と利用できる時間を考えると決して十分な台数のコンピュータが設置されているとはいえないこともその理由の一つでしょう。実際、時間帯によっては利用待ちの学生が教室外まで列を作っている、利用したい時間にコンピュータを利用できないこともあるようです。利用状況においてもワープロや表計算ソフトを利用してレポート等を作成している学生も多くなるようですが、メールしか使わない、インターネットしか利

用しないというように偏りが見られるようです。今後に向けては、できるだけ学生用のコンピュータも一人一台の環境に近づけていく必要があります。が、利用状況の偏りを改善していくには一層のフォローアップが必要と考えます。今年度は「情報倫理講習」の他「Windowsの基礎」「Excelの基礎」および「Wordの基礎」という内容で学生向け講習会を実施しました。次年度以降もこうした基礎的な学生向け講習会を継続すると共に、学生の情報リテラシーの向上に繋がるような講習会、学生のニーズに沿った講習会を企画実施していくことを計画したいと思います。

第二の懸念は、実際に学外者にインターネットやメールを悪用され、誹謗中傷に遭った学生が現実に出始めたことです。情報倫理の喚起はもろろんのことですが、情報社会において個人情報を守り、自らの身を守ることの大切さを伝え、情報流出には細心の注意を払うよう一人一人の意識を高めねばなりません。

最後に、今後の聖隷学園情報ネットワークが進むべき方向について考えてみます。できるだけ、学生が自由にコンピュータを利用できる環境を整えること、そのためには学生一人一台の環境にできるだけ近づけていくことが必

要です。既に、ノートパソコンをすべての学生に貸与する大学も決めています。本学においても実際の授業での利用方法、授業以外でのより良い利用方法両面から三年、五年以内に実現すべき課題として検討していかなければなりません。ノートパソコンの利用は大学の四年次や短期大学の三年次のように実習が中心となり、学校に戻る機会が少ない状況で有効活用の可能性が見出せるかもしれません。また、今後は学内LAN上で学習教材、参考資料を検索閲覧できるようにコンテンツ作りを進めていくことも課題になります。さらに他大学と連携した双方向授業や、外部の専門家がネットワークを介して学外から講義に参加するテレビ会議方式授業の導入など、看護大学、小規模大学といえども実現に向け努力を重ねていかねばなりません。そしてこうした努力と実状を日本全国はもとより世界中にタイムリーかつ継続的に情報発信していく体制を整備していくことが大切です。

一九九八年度に実施した教育研究部門のLANシステムの構築、その他の情報処理関係施設・設備充実事業の内訳は左表のとおりです。

事業内容	施設	事業費	補助金額
コンピュータ教室の機器更新、ネットワークサーバーの設置、教室・演習室・研究室等へのコンピュータ設置 <small>事業費はレンタル料1998年度支払額。下段 [] 内は未払額</small>	大学	2,763 [13,818]	1,381
	短期大学	3,922 [19,610]	1,961
学内ネットワークの設置 <small>(関連するソフトを含む)</small>	大学	28,187	11,811
	短期大学	18,709	7,714
	高等学校	1,233	
	専門学校	265	
大・中教室(4室)への液晶プロジェクター、電動スクリーンの設置	大学	11,445	5,722
視聴覚教材作成室へのノンリア編集機、エンコーダー等の設置	大学	15,105	7,546
コンピュータ教室の改修工事、最新のコンピュータ等の機器設置	高等学校	21,040	10,271
	大学	6,084	
その他コンピュータ及び周辺機器の導入 <small>短期大学・高等学校・専門学校は新たに導入したコンピュータ等のリース料1998年度支払額を含む。下段 [] 内は未払額</small>	短期大学	1,356 [2,722]	
	高等学校	324 [2,337]	
	専門学校	1,462 [5,369]	
	合計金額		111,895 [43,856]

I N F O R M A T I O N

1998年度決算、1999年度予算について

単位千円

科目	消費収支計算書						消費収支予算書					
	自 1998年4月 1日 至 1999年3月31日						自 1999年4月 1日 至 2000年3月31日					
	法 人	大 学	短期大学	高等学校	専門学校	合 計	法 人	大 学	短期大学	高等学校	専門学校	合 計
消費収入の部												
学生生徒等納付金	0	763,573	445,811	320,312	166,780	1,696,476	0	734,440	461,425	302,882	170,000	1,668,747
手数料	0	26,771	13,443	10,879	2,869	53,962	0	22,250	16,350	12,100	2,800	53,500
寄付金	0	4,518	1,333	10,300	178	16,329	0	2,000	1,000	1,000	0	4,000
補助金	0	176,786	94,877	262,172	3,595	537,430	0	150,036	80,119	249,135	3,400	482,690
資産運用収入	101	5,776	4,921	3,254	1,243	15,295	0	10,219	7,387	7,154	1,788	26,548
事業収入	0	0	0	22	0	22	0	0	0	0	0	0
雑収入	842	16,666	20,947	26,040	4,661	69,156	0	4,180	2,944	23,830	800	31,754
帰属収入合計	943	994,090	581,332	632,979	179,326	2,388,670	0	923,125	569,225	596,101	178,788	2,267,239
基本金組入額	33,423	80,379	819	97,994	346	144,477	2	93,416	23,606	29,567	2,844	149,435
消費収入計	34,366	913,711	582,151	534,985	178,980	2,244,193	2	829,709	545,619	566,534	175,944	2,117,804
消費支出の部												
人件費	45,814	554,558	404,822	424,141	75,891	1,505,226	49,780	599,073	401,325	419,220	71,524	1,540,922
教育研究経費	0	234,564	94,213	79,152	18,929	426,858	0	256,815	101,275	87,619	21,427	467,136
管理経費	21,404	34,132	19,840	22,511	8,339	106,226	18,616	37,043	23,985	19,638	8,808	108,090
借入金利息	0	0	11,064	12,646	0	23,710	0	0	10,327	11,188	0	21,515
資産処分差額	0	8,631	1,470	1	11	10,113	0	0	0	0	0	0
予備費	0	0	0	0	0	0	0	4,200	2,600	2,900	800	10,500
徴収不能額	0	0	0	1,472	0	1,472	0	0	0	0	0	0
消費支出計	67,218	831,885	531,409	539,923	103,170	2,073,605	68,396	897,131	539,512	540,565	102,559	2,148,163
当年度消費収入超過額						170,588						30,359
前年度繰越消費支出超過額						1,030,457						859,869
翌年度繰越消費支出超過額						859,869						890,228

1998年度 消費収支計算書

帰属収入は2,388,670千円となり消費支出2,073,605千円と基本金組入額144,477千円を賄うことができました。消費収入超過額は170,588千円となり当初予算額51,159千円に対し119,429千円の増額となりました。主な施設設備整備事業としては情報処理関係の各種補助金を利用して、教育研究部門におけるLANシステムの構築、その他情報処理関係の施設設備充実に155,751千円の事業費をかけ整備しました。高等学校では将来の校舎全面移転を視野に入れ、総合運動場隣接地の土地2,754㎡(59,811千円)を取得しました。前年度繰越消費支出超過額は前年に引き続き若干解消できましたが、15歳人口、18歳人口の急減、将来計画の実現、学園を取り巻く社会情勢の変化への対応に備え、尚一層の財務体質の改善が必要と考えます。

1999年度 消費収支予算書

1999年度は短期大学、専門学校、高等学校で授業料1人あたりの金額を平均4.6%増とし、帰属収入2,267,239千円、基本金組入額149,435千円を予算計上し、2,117,804千円の消費収入額としました。基本金組入額には社会福祉学部増設のための資金積み立てとして85,000千円を第2号基本金に組み入れました。人件費は2002年度社会福祉学部増設を見込んでの教員採用と定期昇給及び人事院勧告による学園の給与改訂で前年比2.4%増の1,540,922千円を計上しました。教育研究経費は前年度に引き続き教育研究部門におけるLANシステムの構築、その他情報処理関係に係る施設設備充実にための経費を反映し467,136千円を計上しました。この中には教育研究活動の維持、向上のために必要な減価償却費が188,111千円含まれています。当初予算においては30,359千円の消費支出超過額となる見込みです。

一九九八年度満足度調査結果

一、満足度調査について

満足度調査は、学生生活に関する事柄について、学生・生徒の「満足度」という指標により点検・評価を行うことで、学生・生徒の考え方を把握すると共に、それらを学校経営や学校運営に積極的に反映させていくことを目的として、大学、短期大学、専門学校及び高等学校の卒業学年の全学生・生徒を調査対象に、一九九四年度から実施しています。

この調査は学校法人が直接実施することにより、学生・生徒が教員を意識せずに回答できることが特徴で、率直な意見が出されています。調査項目は、「教育方針・目標」「進路(就職・進学)」「授業全般」「教員や事務職員」「施設・設備(校舎、図書館、体育施設、厚生施設)」「学生生活(課外活動・下宿、交友関係、その他)」の六項目、設問は八〇前後です。回答方法は、マークシートによる選択回答方式と自由記述式の併用で、選択回答は「大変満足している」「やや満足している」「どちらともいえない」「あまり満足していない」「全く満足していない」の五段階です。

二、調査結果の概要

大学・短期大学・専門学校・高等学校とともに、教職員、進路、授業、友人、学校周辺に医療・福祉施設があることについての満足度が高くなっています。

逆に満足度が低い項目は施設・設備関係で、各学校ともに図書館、体育施設、厚生施設への満足度が低く

校舎は、大学は満足が約半数ですが、他の学校での満足度は低くなっています。

学校別にみると、大学では実習、進路選択、友人、教員の質に対して満足感が高く、小人数・ゼミ形式の授業、国際感覚を身につける、他学との交流、課外活動等は改善の余地があるようです。短期大学、専門学校とともに校舎以外は大学と類似の傾向ですが、短期大学では国家試験対策と施設、専門学校では施設に対する満足度が低くなっています。高等学校では、労作の授業に八割が満足しており、次いで友人、進路相談、研修旅行についての満足度が高く、施設関係、他校との交流に関しては改善の余地があるようです。

三、学校経営・学校運営への反映

「満足度」は主観的なものですが、同じ状況におかれても満足するかどうかは個々により異なります。しかし、私達は、学生・生徒が個々の事柄に対して持つ満足・不満足の感覚を大切にしたいと考えています。

この調査結果は、理事会や教職員が各々の立場で分析し、その重要性や緊急性を判断して、教育内容の充実に、学校運営に、また施設設備の充実にと、その結果を反映させてきました。一九九八年度は情報教育の施設・設備の充実に力を入れた結果、大学ではコンピュータ教室に対する満足度が、従来の一割から七割に増加しました。また、専門学校ではロッカー室の整備により満足度が向上しています。今後、この

編集後記

調査結果を尊重し、学生・生徒一人一人が、より高い満足感を得られるよう、改善に務めたいと考えます。最後に、ご回答いただいた学生・生徒の皆さんに感謝申し上げます。

社会福祉学部設置に向け大きく変化し始めている学園の雰囲気は伝わりましたでしょうか。今回お伝えできなかった高等学校でも、大学・短期大学・専門学校以上に急速に、予想以上の規模の波にもまれていきます。詳細は次号に譲りますが、改めて学園を取り巻く環境の変化への取り組みの難しさを実感しています。さて、我が国最初の私立銀行として創立され一五五年余の歴史と伝統を誇った三井銀行は一九九二年四月、「三井」の名前を捨て、「さくら銀行」となりました。最近では住友銀行との統合に向け全面提携の合意をし、更なる発展を目指しています。企業と学校の連いを無視した議論はできませんが、「何にこだわるべきか」「継承していくべきは何か」を考えさせられる象徴的な出来事です。現在、聖隷学園でも大学、短期大学、高等学校の校名変更の検討が進んでいます。「聖隷」の名称は長く聖隷に関わりを持つ教職員、学生、生徒であればあるほど「愛着」を感じているだろうと思います。あらためて聖隷学園の設置する学校であり続けるとはどういうことなのか、各学校の使命は何かを考える機会なのだと思います。読者の皆さんの声を寄せさせていただきます。

(法人事務局長 堀口路加)